

村野藤吾のタイルの技法に関する一考察

酒井 一光

要旨 村野藤吾は細部にこだわった設計をしたことで知られ、その建築作品を紹介する際に建築部位・材料別に行われることがある。しかし、そこでは建築意匠の主要な構成要素であるタイルについて触れられる機会は少なかった。本論では、先行研究の分析と、新たに行った村野の建築作品に関するタイル工事関係者へのインタビューを通して、村野藤吾の建築のタイル表現、とりわけ技法面での特徴を明らかにする。これまでも村野が設計した建築における目地に言及したものがみられたが、インタビューを通してその具体例を示す。結果として、彼が設計した建築のタイルでは、通常のタイルの貼りにくらべ、目地を極端に大きく、あるいは小さくするといった特徴があらわれやすいことがわかった。また、幅広の目地では、目地材であるモルタルや細骨材の調合に特徴がある点などを指摘した。

はじめに

村野藤吾（1891-1984）は、日本を代表する建築家の一人である。村野は明治24年（1891）に唐津で生まれ、小倉工業学校機械科に学び、卒業後は八幡製鉄所に勤務した。明治44年、2年間の兵役を経た後復職したが、学問を志し、大正2年（1913）早稲田大学予科に入学し、電気学科に進んだ。途中、建築に転科し、大正7年に早稲田大学建築学科を卒業した。卒業後は大阪の渡邊建築事務所に入所し、渡邊節のもので設計を行った。昭和4年（1929）に38歳で独立し、村野建築事務所を開設（同24年村野・森建築事務所と改称）した。昭和59年に93歳で亡くなる直前まで設計に関わり、生涯に設計を手がけた建築の数は300棟を超える¹⁾。

村野藤吾が渡邊節から独立後に設計した建築（以下、村野建築と記す）を評する際、しばしば手の痕跡を残す仕上げ（部位や材料）について触れられる。村野生前の建築作品紹介では年代順、または和風建築のみを区別するものが主体であった²⁾が、没後の作品紹介では、建築類型（ビルディング・タイプ）とならんで建築部位・材料ごとのものが主流となった³⁾。これは、他の建築家にもあてはまり得ることだが、彼ほどそれが顕著な例も珍しい。それは、彼が職人との対話を重視し、現場でものづくりの実際の判断を自ら行うことが多かったことにも由来すると考えられる。

村野没後に建築部位や各種職人へのインタビューを扱ったものとして、古いものでは逝去の翌年、雑誌『建築と社会』に追悼特集として掲載されたインタビューがある⁴⁾。これを発展する形での『村野藤吾の造形意匠』は、部位別のディテール図版を掲載し、同時に関連する職人へのインタビューを

掲載する形をとった。また、京都工芸繊維大学美術工芸資料館における「村野藤吾建築設計図展」のカタログにおいても、先行刊行物を補うように、インタビューが載せられることがあった。

このように、村野藤吾の設計した建築作品は、年代別や和風建築を特化した扱いとともに、建築類型別と建築部位・材料別での紹介が定石となっている。本論では、建築部位・材料別の紹介の中でも、建築意匠の主要な構成要素でありながら、比較的取り上げられる機会が少なかったタイル⁵⁾の表現、とりわけその技法について考察する。

1. 先行研究にみる村野建築におけるタイルの特徴

村野建築の中で、もっとも注目される意匠は、階段、手摺、把手など直接人の手に触れる部分である。また、照明器具なども独立して扱われることが多い。それに対し、タイルは内外装の仕上げとして大きな面積を占めることが多いにもかかわらず、触れられる機会が少なかった。それは、階段、手摺など「村野らしい」意匠を「図」とすれば、それらを支える「地」の部分であることにもよる。例外的に、ドウトン（現・コムラード・ドウトン、1955）、丸栄増築（1956）、東京丸物（池袋ステーションビル／現・池袋パルコ、1957）については、タイルや陶片がファサード・デザインの主要な要素となったために、言及されることがあった。しかし、一般に「地」となるタイル意匠にも、村野はこだわりをみせていた。

ここでは、村野建築におけるタイルの特徴について、先行研究で指摘された点について述べておく。管見の限り、村野建築のタイルについて詳述した研究および論述には、(1)『追悼文集 村野先生と私』（村野、森建築事務所、1986）、(2)和風建築社・吉田龍彦編『村野藤吾の造形意匠③ 壁・開口部』（京都書院、1994）、(3)八谷靖子・井上朝雄による研究、の3つがある。(1)については追悼文集という性格上、関係者の村野に対する追悼文集を集めたもので、タイルに限定したものではないが、工事関係者へのインタビューの中にタイル工事に関する村野のこだわりが見受けられることから、ここで触れることとする。なお、引用文は一部読みやすいように新字に改めた。

(1)『追悼文集 村野先生と私』

本追悼文集で、タイルの技法に関することが記されているのは、次の3か所であり、少々長いが抜粋する。これらの記載は、村野に対する追憶の中の一部であるが、タイルの選定（見本焼）やタイル貼技法を知る上で重要なものといえる。

① 丸栄増築（1956）

[成瀬宗「名古屋丸栄の頃」35-36頁より]

名古屋の広小路通に面した丸栄は、昭和28年に第一期が完成し、同31年に西側を増築した。増築部分の西側（呉服町通側）外壁には、色鮮やかなモザイク画がタイルで表現されている。著者の成瀬宗は当時、清水建設で丸栄の施工を担当していた。

最初にお会いした名古屋の丸栄百貨店の時は、その外装は八段のバンドの勝連のテラゾーブロックで仕切られたその間が八色のカラーコンディショニングモザイクで、華麗な藤色が上方に昇

るにつれ次第に薄くなってゆくというものでした。しかも、既存の東側建物のカラコンモザイクに色を合わせるというもので、三十色の見本焼をしてようやく成功することができました。

又、西側の壁面は「大仏タイルの小口タイルを中心として抽象的な図案でゆく」ということしか分らず、竣工三十一年一月の前年の九月になっても決まらない状態でした。仮のデザインに基づいて、緑・黄・茶・朱・白等何割づつ使用されるか決めて頂き、焼きましたが、図案ができた時とタイルの焼き終りが同時の十一月末となり、寒風の十二月・一月に十分な仮設養生をしながら貼り終え、ようやく竣工に間に合わせたものでした。

② 大阪新歌舞伎座（1958）

[懸山良雄「連続唐破風の思い出」47頁より]

大阪新歌舞伎座は、御堂筋に面する東面に連続唐破風を用いた印象的な意匠である。それに対し、南・北面の西寄りには貼瓦が用いられ、落ち着いた表情をみせている。著者の懸山良雄は当時、大林組で同建築の施工を担当していた。

正面の唐破風につながる南北の妻壁は、当初は黒の洗い出しを考えておられた。「からすの濡れ羽の黒だよ。」と言うことで、お気に入りの左官、浪花組に見本を作って貰うのだが思うようなからすにはなり兼ねる。そこで私は、からすの濡れ羽色は、油漆喰以外には無理であること、黒の洗い出しは日を経るに従って変色する懸念があることを申し上げ、代案として平瓦の突き付け貼りをお願いしたところ、よかろうと言うことになって採用していただいたのである。その後竣工した浪花組の本社の建物は村野先生がご設計だが、そのファサード一面にこの平瓦を突き付け貼りされているのを眺めて、私は心から嬉しく思ったことを思い出した。

③ 新ダイビル（1958）

[荻郷実「先生と突貫の記録（新大ビル、都ホテル、佳水園）」53-54頁より]

新ダイビルは堂島川に面して昭和33年に建てられ、同38年に北側が増築された。水平連続窓が印象的な建物は、外壁の各面に白色タイルが貼られている。著者の荻郷実は当時、大林組で同建築の施工を担当していた。

外装タイルの決定であります。形状は決定しましたが色が決まらず、再三お願いしましたところ白色とのこと、早速白色タイルの見本を提出したところ、このような白色ではない、その時白色の種類につき色々教わりました。早速十二種類ほどの見本を焼き、建物に見本貼りをいたしました。先生は一度見て決定することもなく、日を変え何度も何度もご覧になり決定されます。この時、先生の色に対する厳しさを知りました。（中略）当時、戦後施工した建物の外装タイルの脱落事故が頻発しておりました。（中略）種々検討の結果、貼りモルタルのセメントは躯体コンクリートの収縮率を考慮し、シリカセメントを使用することで許可を願い、また施工面では一日の貼り上げ高さを制限し、水平面に作業範囲を伸すよう、貼付モルタルは貧調合（引用者註：セメントが少なく水が多い調合）のものを入念に充填すること、窓楣タイルは念のため、タイル一枚宛木口にダボ金物を取付け、躯体に取付けたステンレスの控え金物に、銅線で緊結することのご指導を受け施工いたしました。

(2) 『村野藤吾の造形意匠③ 壁・開口部』

本書は、『村野藤吾の造形意匠』全5巻のうちの1冊であり、大部分を占めるのは図版とその解説で、その一項目として「タイル／ブロック」が扱われている。また、①内井昭蔵「村野藤吾作品に見る外壁のマテリアル」、②狩野忠正「消費形態は生産形態に反映する」、③長谷川堯「村野藤吾のファサード美学」の三論文と、資料紹介「ブリック・ワークの手法」が掲載されている。

図版紹介「タイル／ブロック」で挙げられた特徴的な事例のうち、特にタイルの形状と貼り方の技法に関連する記載には次のものがある⁶⁾。関西大学誠之館2号館(1962)では、タイルそのものではないが、鞍型の突起のある「セメントレンガ」をスケッチ入りで紹介し、独特の表情を持つ壁の要因として、その材料に注目した。関西大学法・文学部研究室(1959)では、東西面と南北面でタイルの表面と裏面を貼り替えた例を紹介している。尼崎市庁舎(1962)では、東西壁面の石垣風意匠の表現について「二つのパターンがある。一つは、洗い出しのみで、他の一つは、モザイクタイルに洗い出しで縁取りをしたものである。目地は、すべてモザイクタイルである」(57頁)として、遠景から目地状に見える部分をモザイクタイル貼りとして表現したことを特記している。また、丸栄増築、大阪新歌舞伎座、新ダイビルにおいては、(1)で紹介した『追悼文集 村野先生と私』の中の一節をそのまま紹介している。

三論文の中では、内井論文が最も村野建築におけるタイルの特徴に触れている。内井はここで、作り手である建築家としての視点から目地に着目し、次のように述べている(7頁)。

村野のタイルに対する執着は作品を見ればよく解るが、同時に目地に対する関心の深さも並々ならぬものがあつた。目地巾や目地底の深さが違えば、表情は全く異なる。タイル面の表情はタイルより目地のとり方で決まると思う。バラエティに富んだタイル貼りの作品を見る度に私は村野の独創性を感じるが、この村野の造形を支えてきたのはタイルをひっくり返し、裏を使うといった精神ではないだろうか。

この短い引用文中にも、内井は他の論者の言及することのない目地に着目していることがうかがえ、神戸大丸舎監の家(1931、現存せず)や関西大学法・文学部研究室のようにタイルを裏貼りすることに代表される、通常とは異なる使い方によって多様性と味わいを生みだしていた点に着目していたことがわかる。

資料紹介「ブリック・ワークの手法」では、村野の蔵書の1冊であった“BRICKWORK WORKING DETAILS”の主要図版を紹介し、コメントを付している。タイル貼りではなく煉瓦積みの紹介であるが、煉瓦積みの面から外側にはみ出すような目地の特徴や凹凸のある煉瓦の積み方が、村野建築におけるタイル貼り(一部煉瓦を交えたタイル貼り)と共通する面を持っていることを示している。

(3) 八谷靖子・井上朝雄による研究

両氏による研究には、①「村野建築におけるタイルと煉瓦の使われ方の変遷」『日本建築学会九州支部研究報告』第50号(日本建築学会、2011)、②「村野藤吾の建築における煉瓦とタイルの使い方に関する研究」『芸術工学研究』(九州大学大学院芸術工学研究院、2013)がある。②は①の研究内容をさ

らに発展・深化させたものであることから、ここでは②について述べる。

同論文では、村野建築の外装における煉瓦とタイルの使い方のうち、特徴あるものについて、「(1) 真壁風」、「(2) フランス張り、フランス積み」、「(3) イギリス張り」、「(4) 馬踏み目地」、「(5) 塩焼きタイル」、「(6) 凸張り」、「(7) 裏張り」に分けて考察している。(5)はタイルの材質における特徴で、その他は貼り方・積み方の意匠的な特徴である。(1)(6)(7)は、実例数は少ないが村野の作風の一端をなすもので、村野建築に特徴的な意匠として挙げている。それに対し、(2)～(4)は、一般的な煉瓦積・タイル貼の表現のうち、村野建築にあらわれたものについて検討したもので、(3)は実例が1例のみで、(2)や(4)を好んでいたことを明らかにした。

以上、(1)～(3)を通して、これまで言及されてきた村野建築におけるタイルの主な特徴として、次のような点が挙げられる。

- ・外装タイルの色決定は、竣工数か月前に決定されることも多く、焼色見本などの検討を入念に行っていた。
- ・タイル貼り施工にあたっては、剥離防止などの観点から、現場で直接建築施工者に指示・指導していた。
- ・目地巾や目地底の深さに変化を付けることで、変化に富んだ壁の表情をつくった。
- ・個性的な表情を持つタイル（塩焼きタイル）や、モルタル煉瓦を使ってところどころ凸部をつくる（凸貼り）など、壁面に表情を持たせることに留意していた。
- ・タイルの裏足を表に向けて貼るなど、特殊な使用法が試みられた。
- ・（二丁掛と小口平を用いる際は）フランス貼りを好んだ。
- ・（さまざまなサイズのタイルに対し）一般的に馬踏目地を好んだ。

2. インタビューを通じた村野建築におけるタイルの特徴

本稿では、村野建築におけるタイルの使い方の特徴について、施工上の特徴を知るために、当時の村野建築にかかわったタイル関係者にインタビューを行った。タイル業界は一般に、①製造、②流通・販売、③設計・施工に職種が大きく分けられる。今回インタビューを試みた株式会社平田タイルは、建築用陶磁器・タイル・衛生陶器等を扱う会社として大正8年に京都で創業し、現在は大阪市西区阿波座に本社をおき、タイルを中心とした建材の流通・販売・設計・施工を手がけている。同社は村野建築のうち、大林組が施工した建築を中心に、タイルの納品や施工に数多く関わっていたことから、当時を知る関係者に話を聞いた。

インタビュー内容は、本論の末尾に「インタビュー編」として付した。村野建築に直接関連のない事柄も含んでいるが、村野建築にかかわった関係者・職人の実像を理解する上で貴重であると考えられることから、そのまま掲載した。また、インタビューした方々は、村野建築の中でも最後の時期に関係していたため、村野藤吾存命中のものと、村野が設計し没後に村野・森建築事務所所員の手で仕

上げられた建築の両方がある。また、村野からの直接の指示ではなく、村野・森建築事務所の近藤正志ら、ベテラン所員からの指示である場合も多い。これは、タイル固有の事情ではなく、村野建築施工の一般に共通する事柄といえる。

今回のインタビュー内容から、村野晩年の村野建築のタイルの技法について、次のような傾向をみることができた。

- ・出隅・入隅のアールに仕上げた部分に、タイルを施工する例がみられる。
- ・目地を極端に大きくする、または小さくすることにより、通常の日地と違う印象をもたらす。
- ・幅広の日地では、目地材として大きな細骨材を利用する。
- ・日地の面をタイルの面と同じくするか、盛り上げ気味にする仕上げを好んだ。その際、日地の表面を整えないことがしばしばあった。
- ・目地材は既調合セメントは使わず、セメント、白セメント、砂、珪砂、寒水などを独自の比率で混ぜて用いた。
- ・建設現場で掘削した土や砂を目地材に混ぜ、その建築特有の日地をつくることがあった。

以上のタイル貼りの技法に関する特徴は、主に村野晩年から没後に完成した建築にイえる傾向である。ただ、大き目の細骨材を用いることは、大庄村役場（現・尼崎市立大庄公民館、1937）や中村健太郎法律経済事務所（現・中村健法律事務所、1936）など、戦前の村野建築にもあてはまる点といえる。今回のインタビューで触れることができたのは、300棟を超す村野建築のごく一部、しかも晩年の作品を中心にしたものである。しかし、内井昭蔵が「日地に対する関心の深さも並々ならぬものがあった。目地巾や目地底の深さが違えば、表情は全く異なる」と指摘していた事柄と、今回のタイル関係者へのインタビューは相通ずるところがあり、その実際を裏付けることとなった。

おわりに

本稿では、先行研究の整理と新規のインタビューを通して、前者からは主に建築意匠上および建築施工上からの村野建築におけるタイル使用の特色を整理した。また、後者では直接村野建築のタイル納品・施工にあたった関係者のインタビューを通して、村野建築におけるタイル施工上の特徴の一端を紹介した。

内井昭蔵が指摘していたように、タイルそのものの表情に加え、日地に変化を持たせたことが、村野建築におけるタイル仕上げを他と異なるものにしてきたことを、具体的な証言とともに紹介した。村野・森建築事務所の外壁に見られるように、シャモット状粒子入りの淡い色調のタイルを用い、荒く太い日地を用いた表現を取ることで、遠くからは上品な感じがしながら、近くでは手の痕跡を感じさせる点が、大きな特徴といえるだろう。また、都ホテル大阪（現・シェラトン都ホテル大阪、1985）の地階廊下のように、部位によって日地を極端に大きく、あるいは逆に小さくした点、関西大学法・文学部研究室のように東西面と南北面でタイルの表・裏を変えて貼るなどの手法により、限られた種類のタイルでも多様な表情をもたらしていた。華やかな「村野らしい」といわれる建築細部意匠の中で目立たない存在だったタイルであるが、上品さと手仕事の痕跡の両面を備えることによって、端々

まで手の込んだ飽きの来ない味わい深い表現をつくりだしたといえる。

註

1. 渡邊節から独立前に設計した南大阪教会（1928）は村野の作品として含む。また、村野自身が設計まで手がけ、没後に竣工した甲南女子大学芦原講堂（1988）などの建築も含める。
2. 年代順のものとして、『村野藤作品集1931-1963』（村野藤吾作品集刊行会、1964）等が、和風建築のみをとりあげた代表例として『村野藤吾和風建築集』（新建築社、1978）等がある。
3. 建築類型別の代表例としては、『村野藤吾建築図面集』全8巻（同朋舎出版、1991-92）等が、建築部位・材料別の代表例としては『村野藤吾の造形意匠』（京都書院、1994-95）等がある。
4. 『建築と社会』1985年11月号（日本建築協会）特集「村野藤吾の一断章」に「村野藤吾の思い出」としてインタビュー「村野藤吾と粘土模型」（話し手：三浦栄次郎）、「村野藤吾と照明」（話し手：横田隆）が掲載された。
5. 本稿でいうタイルとは、建築の仕上げ材として使われる薄板状のやきものの総称である。原則として、ガラス質モザイクや大理石片（テッセラ）、Pタイルなどは含まない。ただし、セメント煉瓦については例外として言及した。
6. タイルについては、他に森五商店東京支店（現・近三ビルヂング、1931）における開口部の奥行を浅く見せる表現でタイルを用いたこと、横浜市庁舎（1959）をはじめとする真壁風表現の柱間にタイルが用いられたこと、川崎製鉄西山記念会館（1975、現存せず）や新高輪プリンスホテル（現・グランドプリンスホテル新高輪、1982）において曲面仕上げにタイルが有効だったことが触れられるが、これらはタイル固有の表現というより村野建築の造形全般に関わるものとして除外する。

【インタビュー編】

◆出席者：

- ・平田雅利氏（株式会社平田タイル代表取締役社長兼会長）
- ・弘瀬淳一氏（株式会社平田タイル 取締役副本部長）
- ・木村 徹氏（株式会社平田タイル タイル工務部兼営業本部部長）
- ・野坂允之氏（協力会社、野坂タイル）
- ・倉見芳顕氏（大阪タイル協同組合事務局長）
- ・聞き手：酒井一光

◆実施日：平成26年（2014）4月19日（土）

◆場 所：株式会社平田タイル本社

平田：（株）平田タイルは、大正8年（1919）京都で創業しました。当初はタイルだけでなく、器なども取り扱っていました。当社は、大林組が施工にかかわった建築のタイル工事を多数手がけており、そのご縁で村野建築のタイル工事もいろいろと経験してまいりました。当時の職人の親方でお元気な方は少なくなってきましたが、野坂さんは村野建築をよく知るお一人です。本日は、当社の中でも村野建築をはじめ、豊富な経験を持つメンバーに集まってもらいました。

——それでは、野坂さんの経歴と自己紹介をお願いします。

野坂：昭和31年（1956）からタイルの仕事をはじめ、いま73歳で、もうすぐ74歳になる。大阪に来る前は、広島で煉瓦の仕事を数多く手がけた。昭和30年代は、タイルより煉瓦の仕事が多かった。工場の煙突や炉などの仕事が多かった。煉瓦には、赤煉瓦のほかにイソライト煉瓦、耐火煉瓦、クローム煉瓦などがある。炉では、外側は赤煉瓦、中間をイソライト煉瓦、内側を耐火煉瓦で積む。クローム煉瓦は、特に火力の強い所で使った。辛かったのは、炉の修理の仕事で、足袋が焼けてくるほど熱かった。一般の煉瓦の壁では、煉瓦の仕上がりを均質にみせるため、積みあげた上から弁柄を塗るということもやっていた。

——昭和30年代で、タイルより煉瓦の方が多かったというのは意外ですね。

野坂：昭和30年代といえば、現場が尺貫法からメートル法に代わっていく時期で大変だった。大工はその後ずっと、尺貫法でやっていた。

——タイル関係のお仕事についてはいかがでしょうか。

野坂：古いものでは、千日デパート（1958）、新ダイビルの増築（1963）などがある。

——千日デパートは昔の大阪歌舞伎座を改修したもので、改修設計は村野藤吾、施工は矢島建設です。

野坂：矢島建設は、千土地関係が得意先だと思う。千日デパートのほか、戎橋北西にあった旧吉本会館（1960、現存せず）なども矢島建設の施工で、私も現場でタイルを貼った。

——以前、矢島建設にお勤めだった方から、大阪歌舞伎座を千日デパートに改築する際、大阪歌舞伎座のぶどう棚を大阪新歌舞伎座にそのまま持って行ったという話をうかがったことがあります。大阪

新歌舞伎座、旧吉本会館も村野藤吾の設計です。

野坂：そのほかによく覚えているのは、大阪松竹座のファサード保存工事、大同生命ビルの建て替えで新旧のテラコッタを扱ったこと、なら百年会館、舞洲スラッジセンターを担当したこと。

平田：なら百年会館は、磯崎新の3次元設計で現在でも2つと無い建物です。

野坂：なら百年会館は、3年くらい現場に張り付いて外装タイルをやっていた。舞洲スラッジセンターでは、意匠設計者のフンデルトヴァッサーが途中で亡くなったので、タイルはすべて職方が現場でタイルを割り、目地が通らない様に考えて貼っていった。

——村野建築では、どのようなものを担当されましたか。

野坂：新ダイビルの増築（1963、現存せず）、東京銀行大阪支店（大阪東銀ビル、1970）、宝塚市庁舎（1980）、蹴上の都ホテル（現・ウェスティン都ホテル京都、～1988）などをやっている。

——新ダイビル【写真1】の増築について教えてください。

野坂：新ダイビルの増築では、内外装ともに施工した。「団子張り」の時代だったので、半年以上かかった。コンクリが上がりしてからでないと、外装タイルは始められない。上からピアノ線を下ろして、下から「団子張り積上げ」で貼っていった。

木村：半年以上といえば、季節が変わってしまいますね。

倉見：当時、外装タイルは、1枚ずつ貼っていて1人1日あたり1,000枚／8㎡程度が目いっぱい。タイル職人12～13人で、せいぜい70～80㎡／1日の貼りつけでした。

——新ダイビルの外装タイルは、どこのものでしたか。

倉見：平田タイルから日本陶管の大島さんに発注し、泰山製陶所で焼いていたと思います。

木村：蹴上の都ホテルの改修でも同じでした。

——大阪東銀ビルはいかがでしたか。

野坂：この現場では、実際に村野さんに会った。そのほかは、村野・森建築事務所の方とやり取りしていた。外装のうち東と南面は石貼りだが、北面は有田タイルの小口タイル貼りだった。増築の外装は、別班の横田タイルがやっていた。内部では、トイレの出隅・入隅すべてに、内アール・外アールがついていて大変な仕事だった。

——宝塚市庁舎はいかがでしたか。

野坂：ここでは、増築部分をやった。外装では、既存部分と連続するように貼っていくのが難しかった。外装タイルの目地は、ケレン棒（ヘラ）で搔くだけの仕上げだった。タイルと同面におさめるか、それ以上外側にはみ出すように仕上げるよう指示された。鋸を使ってはダメだった。内部では、増築部の地下の廊下が大変だった。16mmのコインモザイク（直径16mmの円形モザイクタイル）で仕上げるのだが、床と壁の間すべてにアールがついていた。

——同じような仕上げを、東京の千代田生命本社ビル（現・目黒区総合庁舎、1966）の地下の廊下でも見たことがあります。

倉見：目地の仕上がりでは、村野・森建築事務所の人から「なすくったような雰囲気」（押し付ける、こすり付ける、擦り付けるのようなニュアンスか）と言われ施工する職方共々悩まされました。機械的



【写真1】新ダイビル 外観
第1期（手前）と増築部の第2期（奥）



【写真2】シェラトン都ホテル大阪
外観



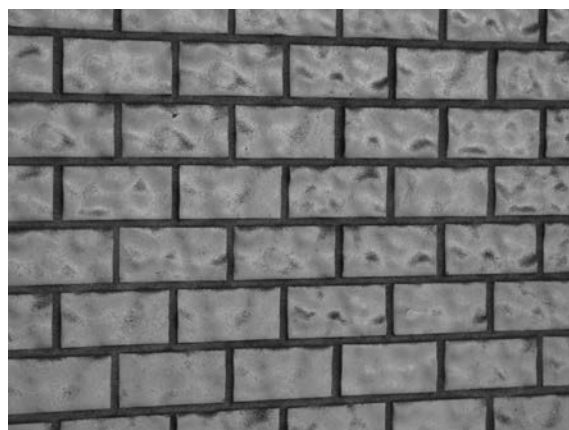
【写真3】シェラトン都ホテル大阪
地下1階廊下壁面の小口タイル



【写真4】シェラトン都ホテル大阪外観
地下1階廊下柱の小口タイル



【写真5】近鉄百貨店阿倍野本店旧館 外観



【写真6】近鉄百貨店阿倍野本店旧館
2階ヴェランダのタイル



【写真7】村野・森建築事務所
外観



【写真8】村野・森建築事務所 1階外壁タイル



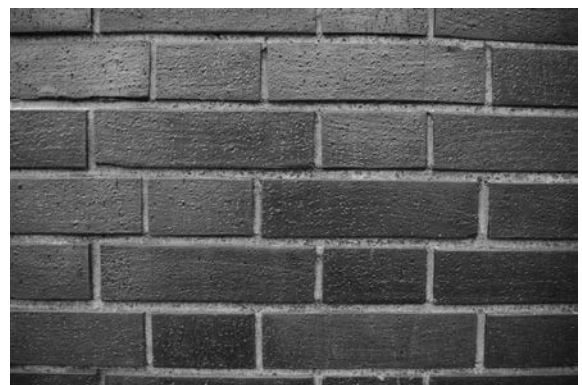
【写真9】中村健法律事務所外観



【写真10】中村健法律事務所 2階応接室暖炉
ボーダー・タイル



【写真11】尼崎市立大庄公民館 外観



【写真12】尼崎市立大庄公民館
外壁の塩焼タイルフランス貼り

な固い雰囲気ではなく、職方の手作業の雰囲気を醸しだすようにしました。

野坂：目地の色がなかなか決まらなかった。目地幅が太かったものもある。目地幅が太すぎるとチューブは使えない。

——都ホテル大阪（現・シェラトン都ホテル大阪、1985）について、教えてください。

野坂：タイル職人の故・吉田信一さんがやっていて、自分は同時期に近鉄会館の改修（1985）をやっていたので、よく見に行った。

——近鉄上本町ターミナルビル（近鉄百貨店上本町店、1973）から都ホテル大阪に続く地下の通路は、壁面のタイルが太い目地、柱のタイルがごく細い目地でした【写真2～4】。

弘瀬：2ミリぐらいの細い目地は糸目地、まったく目地をとっていないのがねむり目地です。

野坂：出水さんという人が、村野建築の太い目地が得意だった。

——蹴上の都ホテルはいかがですか。

野坂：宴会棟の頃は関わっていた。スクラッチタイルなども貼った。

木村：このスクラッチタイルは、25mmなど厚みのあるもので、出っ張っているところもありますが煉瓦ではありません。都ホテルでは、改修もいろいろと手がけました。

——現在のあべのハルカスのところにあった近鉄百貨店阿倍野店旧館（現存せず）【写真5】のタイルはいかがですか。これは、2階ヴェランダ部分の外壁のタイルです【写真6】。

弘瀬：“岩面”のような感じですか。

木村：プレスのように、同じ形ではないですね。

——阿倍野の村野・森建築事務所の外装タイル【写真7・8】はいかがですか。遠くから見ると上品な感じの外壁ですが、近寄ると手仕事の痕跡を感じさせる荒々しさがあります。

野坂：目地は掻き目地というよりは、そのままといった感じがする。軽くこすっているようだ。曲りの部分は、積んだまま、セメントが濃んだ（目地材が外側に不規則にはみ出した）というイメージ。

弘瀬：タイルそのものは、シャモットのような感じですね。

——そのほか、村野建築のタイルの好みについて、どう思いますか。

野坂：巾木は、通常の出巾木は嫌いだった。必ず壁面より一段くぼませて作っていた。それから、宝塚市役所増築部の地下廊下のように、アールが好きでタイル仕上げが大変だった。

倉見：建設時に掘削した現場の土地の砂や土などを目地材に混ぜ込み、使うと聞いています。

——それは面白いですね。

木村：村野建築では、既調合のセメントは使いませんでした。セメント、白セメント、砂、珪砂などを混ぜていました。寒水（寒水石という大理石を砕いた粉）を用いるのが特徴でした。寒水は、白目地や色目地の基礎材になります。

倉見：村野建築でよく使われる太い目地では、骨材を大きくしないと目地がひび割れてしまいます。普通のモルタルの細骨材は3厘（約1mm）以下ですが、村野さんや浦辺鎮太郎さんの目地では6厘以上という指示もありました。

——村野が戦前に設計した中村健太郎法律経済事務所（現・中村健法律事務所、1936）【写真9・10】

と大庄村役場（現・尼崎市立大庄公民館、1937）【写真11・12】のタイルは、いかがでしょうか？

平田：中村健太郎法律経済事務所は、応接間暖炉のボーダータイルの餡釉がきれいですね。

野坂：中村健太郎法律経済事務所や大庄公民館の外装タイルの目地も、細骨材が荒いイメージですね。

——本日はいろいろと、ありがとうございました。

A consideration on the tiling technique of MURANO Togo

MURANO Togo is known for the architectural design that was particular about the details. In case of introducing his architectural works, it may be often performed according to a building element, and materials. However, there was few opportunity mentioning the tile which is a main component of the building design. This study clarifies the characteristic on the tile works of the building of MURANO Togo, especially the technique side through the analysis of the precedent study and the interview to the tile construction worker who went newly. Including UCHII Shozo, there was the person who mentioned the seam of the tiles which MURANO designed. This study shows the specific example through an interview. I clarified that a characteristic of the architecture which he designed was easy to appear in the seam other than the surface shape of the tile, for example, the seam of the tile is extremely bigger or lower. In addition, in the wide seam of MURANO' architecture, I pointed out that compounding of mortar and sand was characteristic.

